

2022 年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作・教養教育院長賞 受賞

名古屋大学における東海地方以外出身学生の
友人関係形成の実態

理学部1年 照屋 智基

名古屋大学における東海地方以外出身学生の友人関係形成の実態

1. 調査の背景

筆者は、沖縄県出身ということもあり、同じ高校から名古屋大学に進学した友人がいなかった。そのため、「入学当初の4月の時点で友人を作っておかないと孤立する」という不安から、入学前にSNS (Twitter) を通じて、同じ名古屋大学に入学が決まっていた東海地方以外出身の学生と出会い、オリエンテーションと一緒に出席して友人になった。2022年4月は、未だコロナ禍の影響が大きく、大学が主催する新生向けのイベントが少ないという要素も重なったため、自ら動かないと友人を作るのは難しいとも感じていた。また、名古屋大学は東海地方出身者が約7割を占めており、入学時からすでに東海地方出身者のみのグループが形成されていることも多い。自身が学生生活を送る中で、東海地方以外出身の学生はそれらのグループに入り難いのではないかと感じるが多かった。

このような自身の経験を踏まえ、東海地方以外から進学し、高校以前の友人がおらず、自分で友人関係を構築していく必要がある新生生に向けて、「どのように行動を起こすと友人を作りやすくなるのか」という指標を作りたいと思った。加えて、筆者の周りでは、東海地方以外出身の学生が、秋学期以降学内の様々な所で友人関係を形成していた。そのため、入学から時間が経過した秋学期以降では、東海地方以外出身の学生においても、学内の友人関係は多様化していると推測した。東海地方以外出身の学生は、入学時に限定すれば、学内に友人がいないことは共通しているのにも関わらず、なぜ学内の友人関係の範囲が学生によって異なってくるのだろうか。また、東海地方以外出身者の間には、友人関係の構築方法に共通点があるのだろうか。これらの疑問を明らかにするために、東海地方以外出身の学生に対して、インタビュー調査を行うことにした。

石川 (2022) によると、コロナ禍における学生の不安やストレスに関するアンケート調査を行ったところ、1年生は学業成績不安、授業不安、生活制限ストレス、学内対人不安の順に得点が高く、学年ごとの比較を行うと、生活制限ストレスを除いた3つの項目においては、2、3、4年生の得点より高いという結果が得られた。吉岡・高橋(2010)によると、高校生の頃とは異なり、履修する科目は学生一人ひとりによって異なるため、人間関係は流動的である。入学後1年間の対人関係における学生の相談内容は、新しい人間関係を作ることやサークル等のグループに入ることに関する相談が多いことを言及している。富山(2018)によると、友人作りを得意とする人の方が早く新しい人間関係を構築し、学校生活に適応すると考えられるが、居心地の良さや周りに受け入れられている感覚は友人作りを不得意とする人においても、入学後1か月ほどで増加し、その後も持続するため、最初の1ヶ月をうまく過ごすことができれば、学校生活を居心地よく過ごせる可能性が高くなる、とのことだった。

このように、新生生にとっての人間関係の重要度は非常に高く、大学での過ごしやすさにも関わる。そのため、友人関係の形成は新生生の避けては通れない大きな問題といえるだろう。

では、新生生は、どのような行動を起こすと友人を作ることができるのだろうか。稲場

(2003)によると、クラスやサークル等の集団に入ることが友人を作ることの近道であり、集団に入るには、①他人に合わせて、自分を取りつくりたくないようにするために、「孤独を苦しめないこと」②集団が楽しんでいるときに自分も参加できるように、「ある程度バカになれること」③誰かが誘うのを待つのではなく、自分の方から集団の中に入るために、「構えないでありのままの自分をさらけ出すこと」という3点が重要である。一方で、福田(2017)によると、最近ではLINE等で入学時にグループが形成されており、乗り遅れた学生の孤立感は深刻で、学業が軌道に乗り、人付き合いの出遅れに気づいてから学生相談室を訪れる学生もいる。そのため、相談室では、相談員との1対1面談だけでなく、談話室やグループワークといった他人と関わることでできる場を設けていたと言及している。

このように、SNSは離れていても簡単にコミュニケーションが取れるため、簡単にグループが形成できるようになった。その反面、流れに乗り遅れた学生は、自分からグループに入るのには困難であり、孤独を覚えてしまう。このような背景から、SNSを多用する現代の学生には、友人関係を形成しにくくなってしまいう問題点があることが分かる。

以上の先行研究では、1年生が感じている不安やストレス、友人を作ることに問題が多いことを明らかにしている。しかしながら、先行研究では、新たなコミュニケーションツールとしてSNSが登場してから、SNS活用以外の方法で、現代の大学生がどのように友人を形成しているのかについては、具体的な言及はなかった。

そこで、2022年春学期の基礎セミナー「大学生論」において、コロナ禍が友人を作るのを困難にした理由を明らかにし、そこから東海地方以外出身者でも友人を作りやすくなる行動を推測するために、名古屋大学に在籍する4人の学年の異なる学生(2人は東海地方以外出身者、2人は東海地方出身者)に対してインタビュー調査を実施した。なお、学年の異なる4人の学生をインタビュー対象者にしたのは、コロナ禍前と後での友人関係の形成方法の共通点や相違点を見出すためであった。その結果、コロナ禍が友人作りに与えた影響としては、対面で会う機会が少なくなり、同じ空間で過ごす時間を短くしたことが大きな問題となっていることが分かった。実際のインタビューの回答でも、「友人関係を形成することにおいて、多くの時間を共に過ごすことが友人を作る上で重要だ」という言及があった。言い換えれば、何らかの方法で、同じ空間で長く一緒に過ごすことが出来れば、友人は作りやすくなるのではないだろうか。また、入学前のSNSの活用は、あくまでも対面で会うためのきっかけに過ぎず、その後対面で会う回数や過ごす時間が継続的な友人になれるかを左右しているため、SNS上でのみの関係だと、友人関係が継続できないこともあると推測できる。さらに、東海地方出身の学生は出身地に対する特別な意識がなく、東海地方以外出身の学生に対しても特別な感情は抱いておらず、出身地に関係なく友人関係を構築していることも判明した。

以上の知見をもとに、本調査では、東海地方以外から進学した学生が、学内では入学時点でどのような友人関係を築いており、その後、入学後から秋時点に至るまでにどのような友人関係を形成しているのか、その実態を明らかにすることを目的に、東海地方以外出身の3人の1年生に対してインタビュー調査を実施した。なお、今回東海地方以外出身の学生に焦点を当てた理由は、前述したように、名古屋大学の学生は、約7割が東海地方出身であり、入学前からある程度グループが形成されているため、東海地方以外出身の学生はその

グループに入れない可能性が高く、友人を作りにくい環境にあると推察したためである。加えて、筆者の周囲を見ても、1年生の秋時点では、入学時よりも交友関係が広がっている傾向が見える。今回の調査では、それぞれ異なる交友関係がどのように形成され、その共通点はどこにあるか、また、友人関係を形成していく動機はどのようなものがあるかについて、特に注目して明らかにしていくことを試みる。

2. 調査方法

2.1 調査方法

今回の調査では、名古屋大学に2022年度に入学した理系学部にも所属する男子学生3人を対象とした。インタビューは2022年11月17日から11月24日の間に、筆者と調査協力者である学生の1対1で行った。インタビュー時間は1名につき約60分とし、事前に定めた質問項目に沿って半構造化インタビューを実施した。

インタビュー対象者は、東海地方以外の高校出身者のうち、大学入学時点で高校以前の友人が学内にいなかった学生で、かつ調査時点の2022年秋の段階では学内の友人関係の広さや友人を形成する場が異なっているような学生を選択することにした。筆者自身や筆者の同級生を通じて、該当する学生に対して調査目的を説明し、協力を承諾した学生3人に対してインタビューを実施した。インタビューに際して、研究目的、概要、個人情報の取り扱い、結果の公表の際には個人が特定されない形で行うこと等について説明し、協力者より同意を得た。

インタビューでは、①出身地や高校時代の友人関係、サークルへの加入等のインタビュー協力者の背景、②入学時の友人関係、③春学期および秋学期の友人関係、④友人の必要性や友人に求めること、⑤東海地方出身者について思うこと、の5項目に関する質問を行った。

インタビューで得た結果の記録を基に、それぞれの発話を意味のまとまりごとに分けたうえで通し番号を付し、その発話の内容を簡潔に表現するラベルを付した。そのうえで、関連するラベル同士をまとめるカテゴリを付した。ラベルおよびカテゴリの作成は、名古屋大学に所属する教員と筆者の間で協議し、カテゴリ間の関係性も含めて、二人の見解が一致するまで、インタビュー記録を参照しながら見直しを行った。

以上の分析の結果、①入学時の不安要素、②友人になる理由、③友人関係の形成方法、④出身地に対する意識、⑤東海地方出身者に対する思い、という5つのカテゴリが見出された。この5つのカテゴリごとに、どのような発話によって、何が明らかになったか記述していく。

2.2 調査対象者の背景

調査対象者の背景は次の表1の通りである。

表1 調査対象者の属性

対象者	性別	所属	出身地方	住居	学内の高校以前からの友人の有無	サークルの所属
A	男	理学部	近畿地方	大学の寮	いない	なし
B	男	理学部	東北地方	アパート	いない	2つ所属しているが、あまり参加していない
C	男	工学部	四国地方	アパート	同じ高校から進学した人はいるが、面識なし	2つ所属

学生 A は、理学部に所属する近畿地方出身の男子学生であり、現在は寮に住んでいる。学内に高校以前からの友人はおらず、サークルには加入していない。学生 B は、理学部に所属する東北地方出身の男子学生であり、現在はアパートで一人暮らしをしている。学内に高校以前からの友人はおらず、サークルには 2 つ在籍しているが、現在はあまり活動には参加していない。学生 C は、工学部に所属する四国地方出身の男子学生であり、現在はアパートで一人暮らしをしている。学内には、同じ高校から進学している学生はいるが面識はない。また、サークルには 2 つ加入していた。

3. 調査結果

3.1 入学時の不安要素

入学時の不安要素について尋ねたところ、学生 A が入学時に抱えていた一番の不安要素は友人関係であった。「入学時に友人ができるか分からない」という不安から、学生 A は「孤独感」を抱えていた。その後、入学前に SNS を通じて知り合った他の新入生とガイダンスの時に対面し、授業が開始される前の時間を共に過ごすことで、徐々に不安は解消されていった。学生 C も同様に、入学時の一番の不安要素は友人関係であり、その理由として、「高校でも友人作りが得意ではなかったのが、友人関係に不安があった。」と回答した。そのため、4 月当初は自分の周囲では既にグループが形成されていたため、一人でいることに焦りを感じていたが、「最初なので仕方ない」と割り切っていたような様子も窺えた。

反対に、学生 B の入学時の不安要素の中には友人関係は含まれていなかった。学生 B の入学時の不安としては、「教科書販売等の事務作業が正しく行えていたかよく分からない」という点を挙げており、友人関係については特に不安を感じていなかったという回答が得られた。その理由を 2 点挙げていた。1 点目は、「入学直後は自分の生活リズムを整えることが最優先事項」であって、「自分が興味を持っている学問を好んでいる人はどこかにいると思っていたので、そのうち友人はできるだろう」と考えていたということ、2 点目に、同じ高校から他大学に進学した友人も、学生 B と同様に友人作りがうまくいっていなかったことを聞き、自分の状況が珍しいものではないと自覚したことである。

このように、入学時に友人関係について不安に思う人が多いが、中には不安に思わない人もいるということが明らかになった。

3.2 友人になる理由

次に、大学入学後の友人がどのような場面で必要となるか、また、その際どのような人を友人にしたいかという、個人の考えを尋ねた。学生 A は、「同じ授業を履修し、授業内容や課題を共有できたり、同じ趣味を持っている」といった、自分と共通点がある友人関係を求めている。他にも、「テスト前に過去問の情報をもらいたい」「勉強関連の情報をもらうことが出来たらいい」という回答もあった。学生 B は、趣味や学問への興味の共通点があることや、「テスト対策として勉強会を行ったり、自身のどうでもいような話を聞いてくれたり」といったように、共通体験ができることを友人に求めていることが分かった。学生 C は、「趣味

の話ができる」「ある程度活発的な人が友人の理想像」と回答した。また、夏休みなど自分一人で過ごせる時間が増えた際に、「一人だと時間を持て余してしまうので、友人がいればよかった」と話しており、空いている時間を友人と共有したいと考えていることが分かった。

このように、友人に対して求める場面や友人像には、個人によって若干の差異は見られるが、3人の回答に共通していたことは、自分の関心と同じ関心や志向を有している人であることを友人になる前提条件としていたことであった。

3.3 友人関係の形成方法

それでは、大学に入学してからインタビューを受ける7ヶ月の間に、3人はどのように具体的に友人を作っていたのだろうか。学生Aは、前述の通り、入学時にSNSを活用し、実際に会って仲良くなったほかにも、入学時には、全学学生会主催の「クラス結成会」を通して、同じクラスに所属する友人と仲良くなったパターンの二通りがあった。また、学生Aの場合は、SNS上のみで交流をしていた場合は、その後、対面での接点がなかったため、自然に疎遠になった学生もいた。さらに、春学期中に、入学時に友人になった学生と共通の趣味を通じて数珠つなぎの要領で友人が増えたり、秋学期に大学での学科進学の説明会をきっかけにSNSを使って友人を作ったりと、順調に友人関係を広げている様子が窺えた。

学生Bは、大学の新生歓迎等のイベントでは友人は作る事ができず、SNSも情報収集のための活用が主な目的であったため、入学時では「友人はいなかった」と回答した。しかし、「自分の生活リズムが整った」5月下旬頃に、理学部のSNSを通じて、以前からやりたいと考えていた自主ゼミの募集を始め、そこに集ってきた学生と友人になったと回答した。ただし、そこでできた友人は、同じ授業を受講することはほとんどなく、ゼミ以外の接点はあまりないとのことだった。しかし、学生Bは「同じ授業を取っていなくても、不安に思うことはなく、十分満足している」と回答した。それに関連して、「ゼミの募集を始める前に不安に思ったことはなかったか」と尋ねたところ、「場違いかもしれないとは思ったが、募集をしたところで、誰が募集をしているのか分からないから大丈夫だろうと思っていた」という回答が得られた。

学生Cは、入学時にSNSを活用して、共通の趣味を持つ友人ができたり、4月からサークルに所属したことで、サークル活動を通じた友人ができたことと回答した。また、学生Aとは異なり、「最初から趣味が同じ学生とSNSを通じて知り合っていたため、会話が弾んだ。今も仲は良いままで。」と回答した。サークルでできた友人のうち、同じ学科の学生はいないため、授業は基本的に一人で受けているが、「一人でいることに順応できている」とことと、「サークルが心のよりどころになっているので、基本的に問題はない」という回答だった。

このように、3人の具体的な友人関係の形成方法には多くの違いがみられるものの、趣味や価値観が似ている人とは友人になりやすく、関係が継続しやすい傾向があることが分かる。

3.4 出身地に対する意識

続いて、「大学で友人を作る際に、出身地について意識したことがあるか」と尋ねたところ、学生Aは、「友人は東海地方以外の出身者が多いが、それはたまたまであり、出身地は関係な

い」と話しており、東海地方以外出身の学生に対して親近感があったが、「趣味等の共通項がある人と仲良くなりたいし、出身地はあくまでも共通項の一つにしか過ぎない」という回答が得られた。学生 B は「ゼミが目的で、そこを通じて友人ができたので、出身地については意識したことがなく、興味が共通していたら友人になれると思っているので、出身地は関係ない」という回答だった。学生 C は「友人が同じ地方出身なら、少しテンションは上がるし、話のネタにはなるがそれぐらいで、出身地に対して特別気になることはなく、出身地に関するうがった見方はない」と回答した。

このように、友人を作る上では、趣味や興味などの共通点があるかどうかということが最優先されるので、出身地意識は特にないようである。

3.5 東海地方出身者に対する思い

最後に、「東海地方出身者に対するイメージの変化や東海地方出身者とも友人になりたいか」と尋ねたところ、学生 A は「学部が同じ人は、優しい人が多いが多く、雰囲気はゆったりしていて自分と似ている人が多い気はするが、東海地方出身に対して関心がなく、毛嫌いはいないが、好意的に仲良くしていこうという気はない」と回答した。学生 B は「自分と興味が合えば東海地方出身でも友人になりたいが、そもそも誰が東海地方出身なのかよく分かっていない」という回答だった。学生 C は「入学時は元から友人関係ができていたことに対して、若干引け目を感じていた部分もあったが、今はグループでも出身地は関係ないと思っており、東海地方出身だから特別扱いすることはないが、友好関係を広げたいので仲良くなりたい」という回答が得られた。

このように、東海地方出身ということに対して、特別な意識は無いように思えるが、学生 C が言及したように、仮に入学時にグループが出来上がっている状況に対して、最初は引け目を感じていたとしても、その後、自身の友人関係が形成されるにつれて、徐々にそのような意識は薄れていっている可能性が高い。

4. 考察

2022 年春学期の基礎セミナー「大学生論」で行った調査では、同じ空間で過ごす時間が長ければ、友人を作りやすくなると考察した。しかし、今回の調査を踏まえると、同じ空間で過ごす時間が長いことに加えて、自分と相手の関心や志向が共通していることが友人になる条件に大きく影響を与えていると考えられる。これは、調査結果「3.2 友人になる理由」において、3 人の学生が友人に自分との共通点があることを求めていたことから推測できる。

また、春学期の調査では、SNS 上だけの関係は、友人関係が継続しにくいと考えられていたが、今回の調査では、学生 C のように出会うきっかけに趣味といった共通点があると、話題が尽きないため、SNS 上だけの関係においても友人関係を継続させることができることが判明した。

さらに、東海地方以外出身の学生は、学生 C のように、入学当初は東海地方出身の学生の間でグループが形成されていることに対して、引け目を感じる場合もあるが、友人ができるにつれて、次第にそのような意識は薄れていき、「東海地方出身」という肩書きに関心がなく

なっていくことが明らかになった。つまり、入学から時間が経つにつれて、友人形成においては、学生の中に「出身地」という垣根がなくなっていくと考えられる。

これらのことから、東海地方以外出身の学生が孤独から抜け出して、学内に居場所を作るための行動は次の2点が考えられる。まず、積極的に他の学生と同じ空間で同じ時間を過ごすことである。ただし、他の学生と出会う方法は人それぞれである。今回の調査に協力した3人の場合は、学生Aは全学学生会主催の「クラス結成会」、学生Bは自主ゼミ、学生Cはサークルが出会いの場となっており、このような出会いの場は大学側から提供されることもある。自分で開拓することもある。そのため、友人が欲しいならば、どのような出会いの場を活用するにしても、自分から行動をすることが重要であるといえる。ただし、入学時に友人がいなかった学生Bが、友人がいなかったことに対して焦らなかったように、孤独という状況に焦りすぎるのは、あまり良くないだろう。これは、稲場(2003)が言及したように、自分をとりつけないように「孤独を苦しめない」ことが、集団の中に入りやすくし、友人作りの近道になるのであり、孤独である状況に焦って自分を相手に合わせていってしまうと、友人作りがうまくいかない可能性があるためである。そのため、一人で行動することを気にしないスキルを持っておくことも大事であると考えられる。

次に、「興味や趣味が共通している」ことが友人を作る上で大きな影響力を持っていたことから、自身の志向や関心を開示することが重要であると推察できる。これは、学生Aは共通の趣味を通じて友人を増やすことができた、学生Bは自分の興味を開示して、ゼミの募集を行ったことで友人ができた、学生Cが趣味という共通点からSNS上で友人ができた、自分のやりたかったサークル活動を通して友人ができたように、友人になるきっかけとして趣味等の共通点があることが最優先されていたためである。稲場(2003)が「構えないでありのままの自分をさらけ出すこと」が友人作りでは重要であると言及した通り、自分の興味、関心を他の学生に伝えることは、友人を作る上で非常に大きな意味を持つことが分かる。

一方で、調査結果の「3.4 出身地に対する意識」「3.5 東海地方出身者に対する思い」における学生3人の回答から、友人関係を形成する時に、出身地への特別な意識はないことが、今回の調査で改めて分かった。今回の調査結果では、出身地は友人作りの障害にはならないといえる。しかし、春学期の調査では、東海地方出身の学生が東海地方以外出身の学生に対して特別な思いを抱いていないこと、加えて、今回の調査では、学生Aが東海地方以外出身の学生に対して親近感があったと話していたことや、学生Cが「友人が同じ地方出身なら、少しテンションは上がるし、話のネタにはなる」と言及したことを踏まえると、東海地方出身者が多い名古屋大学においては、自分が東海地方以外出身であると開示したり、自分がこれまで住んできた地域の特徴といった話題から、他の学生に興味を持ってもらうことができるかもしれない。加えて、そこで興味を持ってもらった学生との間に、趣味や関心といった共通点があると、その後友人になる可能性が高いと考えられる。つまり、東海地方以外出身者が東海地方以外出身であることを周囲に伝えること自体が、友人を作る上で有効に働くと考えられる。

5. まとめ

筆者は、入学当初は入学時に友人を作っておかないと、その後話せる人ができず、孤立すると思っていた。また、名古屋大学においては、東海地方以外出身の学生が友人を作るとは、東海地方出身の学生と比べて、とても高いハードルがあると考えていた。しかし、これまでの調査を通して、入学時に友人ができなくても、その後の行動次第で友人は自然にできること、出身地に対する意識は時間が経つにつれて薄くなっていくことが判明した。そのため、筆者の「友人」に対する印象は、入学当初に比べて大きく変わった。

また、今回のインタビュー調査において、学生3人はそれぞれ違う状況ではあったが、自分から他の学生との交流を行ったことによって、友人関係を形成していた。そのため、筆者が4月時点で感じていた「自分から行動を起こさないと友人を作るのは難しい」という推測には正当性があると思われる。

さらに、今回の調査において、3人の学生がどのような友人を求めているのか尋ねたことによって、今まで無意識のうちに思っていた筆者の理想の友人像について明文化することができたので、他の学生が友人に対して求めていることを知ることは、個人的にはとても意義があったと感じている。

ただし、これまでの調査では、友人関係を形成することができた学生のみインタビュー調査を実施しているため、友人作りがうまくいかなかった学生の声は反映されていない。人付き合いの出遅れに気づいてから学生相談室に訪れる学生がいる、と福田(2017)が言及するように、友人がうまく作れなかった学生の苦悩は大きく、友人がないことが大学での居心地が悪くなることにつながり、最悪の場合、大学に登校しなくなる可能性がある。そのため、友人作りがうまくいかなかった学生に対しても調査を行うことが今後の課題である。

今回の調査では、東海地方以外出身の学生が、友人を作りやすくする行動として、積極的に他の学生と同じ空間で同じ時間を過ごすこと、自身の志向や関心を開示すること、の2点を提示した。この2点を参考にし、友人作りがうまくいったならば、これ以上嬉しいことはない。

この論文を執筆するにあたって様々な方にお世話になった。2022年春学期の基礎セミナー「大学生論」においてインタビュー調査に協力して下さった4名の学生、今回のインタビュー調査に協力して下さった3名の学生、インタビュー対象者を紹介してくれた同級生、ならびにTAの横山岳紀氏、およびインタビューでの質問内容の作成やインタビューで得た結果の記録を基にラベル、カテゴリの作成、論文の推敲に協力して下さった安部有紀子准教授、丸山和昭准教授に深く感謝する。

[参考文献]

石川悦子(2022)「コロナ禍における大学生の学生生活に対する不安感とストレス」『こども教育宝仙大学紀要』13: 13-20。

吉岡和子・高橋紀子(2010)『大学生の友人関係論—友だちづくりのヒント』ナカニシヤ出版。

富山尚子(2018)「大学入学後の女子大学生の友人関係について」『日本心理学会大会発表論文集』82: 98。

稲場秀明(2003)『大学は出会いの場—インターネットによる教授のメッセージと学生の反響』大学教育出

版、19-22。

福田真也(2017)『新版大学生のこころのケア・ガイドブック—精神科と学生相談からの17章』金剛出版、
179-184。